

お薬を飲み忘れた時の対応、 知っていますか？



薬剤部 薬剤師
さくらい かおり
櫻井 香織

お薬を正しく服用することは とても大切です

「お薬を飲むのを忘れていた!」そんな経験をしたこと、一度はあると思います。お薬は決まった時間に服用し、からだの中のお薬の量を一定以上に維持することで効果を発揮します。ある抗がん薬に関する調査では、10回に1回以下の飲み忘れの人は94%効果があったにも関わらず、10回に2回飲み忘れがあると30%ほどしか効果がなかったというデータもあります。些細な飲み忘れでも、とても大きな影響が出てしまいます。

医師は、患者さんから伝えない限り、お薬はちゃんと飲んでしていると判断し、必要に応じてお薬の変更や量を増やすことを考えます。もし飲み忘れが多いと、正しい診察ができなくなります。お薬の効果を正しく判断するためにも、きちんとお薬を飲み、飲み忘れた時には診察の際に伝えてください。

飲み忘れに気づいたら

お薬を飲む時間を過ぎてから、飲み忘れに気づくこともありますが、お薬の飲み忘れたタイミングが服用時間と近い場合には、

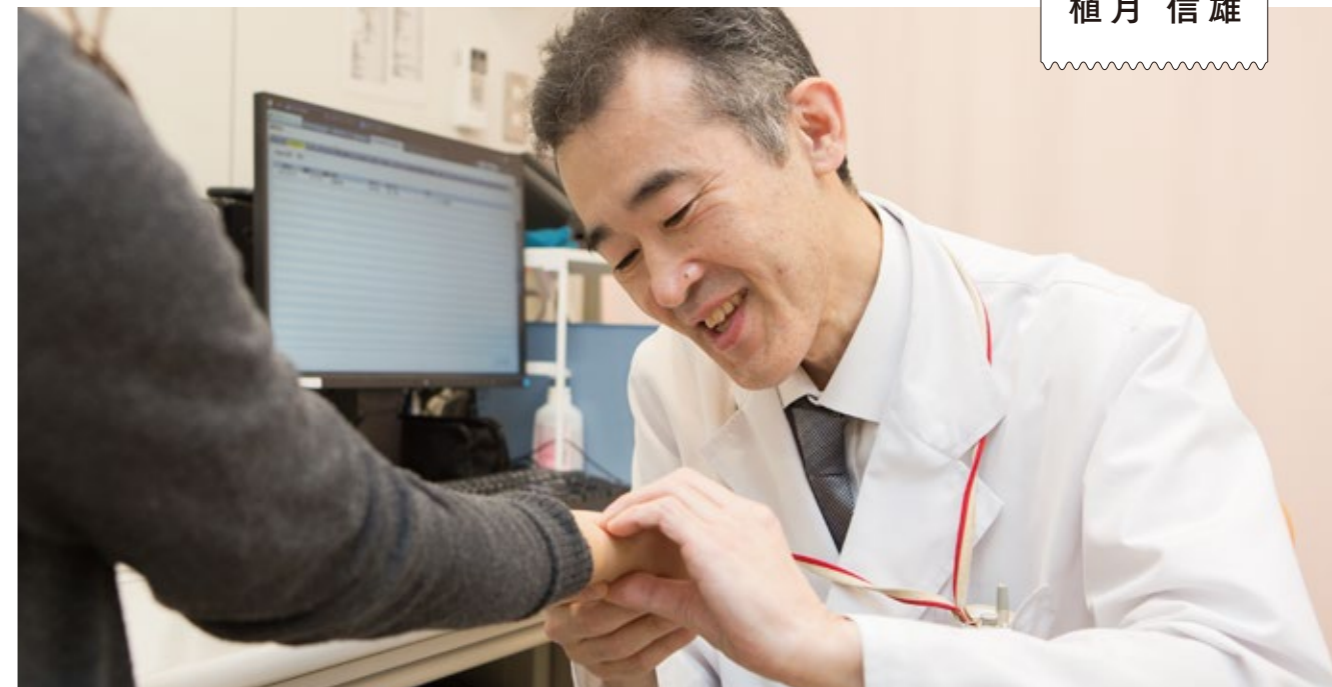
気づいた時に服用することができます。気づくのが遅くなった場合には次の服用時間まで待ちましょう。1回分飲んでいないからと、一度に2回分のお薬を飲んではいけません。からだの中のお薬の量が一時的に必要以上に多くなり、副作用の起こる可能性があるためです。

お薬によっては、服用タイミングを間違えると効果が弱くなることや、副作用が出てしまうことがあります。例えば、糖尿病治療薬の一部は食直前に服用しますが、違うタイミングで服用すると、低血糖の恐れがあります。沈降炭酸カルシウム(血液中リン濃度の高い患者さんや透析の患者さん)は、食直後に服用し、食事のリンと結びついて効果を発揮します。食直後以外に服用した場合は、効果が下がるだけでなく、お薬の成分がからだに取り込まれ、血液中のカルシウムが高くなる恐れがあります。

お薬によって対応が異なるので、あらかじめ説明を受け、対応がわからない時には自分で判断せず、医師や薬剤師に相談しましょう。また、飲み忘れが多い時にもご相談ください。ライフスタイルにあわせてお薬に変更したり、飲みやすく袋にまとめる一包化など工夫して、飲み忘れを一緒に防ぎましょう。

漢方外来

麻酔科・漢方診療ユニット
特定講師
うまつき のぶお
植月 信雄



最近、診療に漢方薬を活用する医師が増えてきています。漢方医療は伝統中国医学を起源とし、日本で独自に進化した医学です。当院に設置されている『漢方外来』と『女性漢方外来』では、漢方医学独自の考えに基づいた漢方治療を行っています。外来棟4階の『漢方外来』では、あらゆる患者さんの様々な症状に対応した診療を行い、外来棟3階の産科婦人科内にある『女性漢方外来』では女性特有の症状に対応しています。

漢方外来では西洋医療では説明が難しい症状、治療に難渋する症状でお困りの患者さんに対して、まず、四診(望診・聞診・問診・切診)と呼ばれる漢方医学独自の診察を行います。その上で、西洋医学の診断名に相当する「証」を判定し、証に基づいた漢方薬を処方することで症状を取り除いていきます。

世の中で一般的に使われる漢方薬は、顆粒剤や錠剤などに加工された医療用エキス製剤(以下エキス製剤)です。当院ではエキス製剤に加え、生薬を用いた煎じ薬も処方しています。煎じ薬とは、数種類の生薬を水で40~60分くらい煮出して作る液状の飲み薬のことで、湯液と



も呼ばれています。エキス製剤は服用や携帯に便利ですが、患者さん一人ひとりの体質や症状に合わせた細かい調整が難しい場合があります。また、複数のエキス製剤を服用することで、重複している成分に

より思わぬ副作用がでる場合もあります。煎じ薬は、毎日煎じるという手間がありますが、患者さんの体質や症状に応じて生薬の配合を変更したり、別の生薬等を加えたりするなどの調整をすることができます。患者さん一人ひとりに合わせてきめ細かく対応することで副作用を減らすことにもつながります。当院での煎じ薬処方、エキス製剤と同様に保険診療で行っております。

『漢方外来』は、水曜日を除く平日に診療を行っています。「倦怠感」、「めまい」、「冷え」や西洋治療でも改善しない「痛み」などでお困りの方は、ご相談ください。

漢方外来の診療内容や診療実績などにつきましては、麻酔科ホームページ(<http://anesthesia.kuhp.kyoto-u.ac.jp/about/herbal-medicine>)をご覧ください。

【漢方診療の四診】

<p>望診 べうしん</p> <p>視覚を用いた診察。顔色や皮膚の色のほか、舌の様子を見る舌診も含まれます。</p>	<p>聞診 ぶんしん</p> <p>聴覚と嗅覚を用いた診察。声の大きさ、においをもとに診察します。</p>
<p>問診 もんしん</p> <p>現病歴や既往歴だけでなく、患者さんの体質傾向(寒がり、暑がり)などを聞き出すための質問をします。</p>	<p>切診 せつしん</p> <p>触覚を用いた診察。脈の深さ、強さ、速さなどをみる脈診や、お腹に触れ抵抗感や圧痛の有無をみる腹診などで判断します。</p>